

戦後文学

出席者

佐藤勝（司会）

山田博光

伊豆利彦

鳥居邦朗

亀井秀雄 堀木博礼

草もなく木もなく実りもなく吹きすさぶ雪風が荒涼として吹き過ぎる。

はるか高い丘の辺りは雲にかくれた黒い日に焦げ、

暗く輝く地平線を付けた大地のどこどこに

黒い漏斗形の穴がぼつりぼつりと開いている。その穴の口の辺りは

生命の過度に充ちた唇のような光沢を放ち堆い土饅頭の真中に開いているその穴が、

繰り返される、鈍重で淫らな触感を待ち受けて、

まるで軟体動物に属する生きもののようになににも大地に口を開けている。

そこには股のない、性器ばかりの不思議な女の体が幾重にも埋め込まれていると思える

どういつ訳でフリーゲルの絵には、大地にこのような悩みと痛みと疼きを感じ、

その悩みと疼きによつてのみ生存を主張しているかのよう

黒い穴が開いているのであろうか。——野間宏 唯い絵より



「シンポジウム」日本文学

19

戦後文学

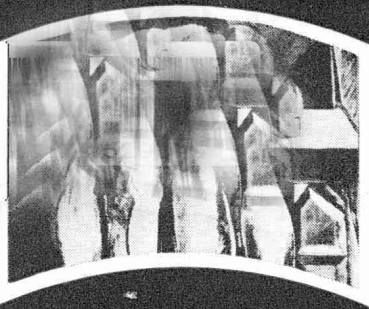
出席者
佐藤勝 司会

山田博光

伊豆利彦

鳥居邦朗

亀井秀雄 堀木博礼



日本文学

19

出席者略歴

さとつ・まさる 一九三一年生。東京大学文学部卒業。現在武蔵大学講師。主要論文は『日本近代文学体系』（角川書店）九・三〇・五巻の解説注釈など。

やまだ・ひろみつ 一九二八年生。東京都立大学大学院博士課程修了。現在帝塚山学院大学教授。主要論文は『安部公房論』（『日本文学』40年4月）『戦後文学の出発点』（『日本文学』42年1月）など。

いず・としひこ 一九二六年生。東京大学文学部卒業。現在横浜市立大学文理学部教授。主要著書は『日本の文学』（汐文社・共著）など。

とりい・くにお 一九三三年生。東京大学大学院博士課程修了。現在武蔵大学教授。主要論文は『太宰治における文学精神の形成』（『国語と国文学』34年11月）『戦後における私小説的意識』（『国文学』41年3月）

かめい・ひでお 一九三七年生。北海道大学文学部卒業。現在北海道大学文学部助教授。主要著書は『伊藤整の世界』『現代の表現思想』（以上講談社）『中野重治論』（三一書房）『小林秀雄論』（塙書房）など。

ほりき・ひろのり 一九三二年生。東京大学文学部卒業。主要論文は『吉行淳之介』『砂の上の植物群論』（『共立女子短大紀要』12号）『島尾敏雄』『帰巢者の憂鬱』論』（『国文学』48年10月号）など。

司会者の諒解により検印を省略します 5205

シンポジウム日本文学19

戦後文学

昭和52年5月25日 初刷印刷
昭和52年5月30日 初刷発行

司会者 佐藤 勝

発行者 鶴岡 隆巳

発行所 株式会社 學生社

東京都千代田区麹町局区内九段南2-2-4
電話 03 (263) 2611 (代) 振替・東京 18870 番
編集担当 土屋 晃三

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

『シンポジウム』

日本文学

——戦後文学・目次

第一章 昭和二年の意味

年表・昭和二〇年八月―二三年二月

報告 山田 博光

『近代文学』と近代的自我

『近代文学』のあり方―ニゴイズムを視座として

無頼派・太宰を視座として

民衆論と『近代文学』

無頼派は戦後文学か

アルティストとアルティザン

無頼派・『近代文学』派・戦後派

通俗小説への傾斜

『綜合文化』と戦後派作家

第一次戦後派と第二次戦後派

注及び解説

第二章 戦後派の出版

年表・昭和二〇年八月―二三年

報告 伊豆 利彦

第一次戦後派の共通項

野間宏における民衆像

『暗い絵』と『青年の環』の間

野間宏と本多秋五たちと吉本隆明たちと

椎名麟三における民衆と日常性

「美しい女」の評価	二七
梅崎春生の場合	三〇
中村真一郎の特殊性	二六
第一次戦後派における中村真一郎	二九
夢と現実との関係——五部作の評価	三四
注及び解説	三九

第三章 戦後文学の纂奪

年表・昭和二十四年一月—三十二年二月

△報告▽ 鳥居 邦朗

見取り図として	四五
第一次戦後派の継承——大岡昇平の場合	五五
自己の対象化と歴史化	六二
占領下の認識の中で	六六
第一次、第二次戦後派をどう区分するか	七三
第一次戦後派の継承——堀田善衛と武田泰淳	七四
「金閣寺」の読み方	八二
戦後派の逸脱か——三島由紀夫の位相	八六
三島由紀夫の世代と精神	九三
島尾敏雄——「死の棘」をどう読むか	九六
認識における日常性と非日常性	一〇三
吉行淳之介の場合	一〇五
安部公房の場合——結びにかえて	一〇八
注及び解説	一一

第四章 戦後文学の転換

年表・昭和二十七年一月―四〇年二月

《報告》 亀井 秀雄

第三の新人の位相	三三
「日常の中の異常」について	三〇
知識人と土着の間――第三の新人における批評	二四
劣等生か優等生か――第三の新人における批評	二六
大衆社会状況における家庭	二〇
昭和三〇年代――見取り図として	二四
開高・石原・大江の登場――大江を中心に	二九
戦後文学幻影論の本質	二一
注及び解説	二四

あとがきにかえて	二七
索引	二九

第一章
昭和二年の意味



終戦直後の正月風景（昭和21年1月）
後方は早稲田大学（©朝日新聞社）

12	11	10	9	8
「吾等の志向」(豊島与志雄)、「英霊に詫びる」(大仏次郎)、「慚愧の念で胸さく——英霊に詫びる」(吉川英治)、「作家耐乏の跡」(上林曉)、「文化の反省」(高橋健二)、「マツカーサー司令官に寄す」(賀川豊彦) 発表。 戦争終結の詔書放送。大日本言論報国会、日本文学報国会解散。連合軍先遣部隊厚木飛行場に到着。連合国総司令部(GHQ)を横浜に設置。連合国最高司令官マツカーサー厚木に到着。 『惜別』(大宰治) 刊。「わが懺悔、わが反省」(三宅雪嶺)、「日本の門出」(次郎)、「悲しき兵隊」(火野葦平)、「新文化建設の目標」(谷川徹三)、「日本論の文学」(春野季吉)、「精神的な荒廃」(徳永直)、「明日を担ふもの」(中野好夫) 発表。 『科学』「思想」復刊。辰野隆・新居格・正宗白鳥ら、日本文化人聯盟發起人会を開催。GHQ、日本政府に言論及び新聞の自由に関する覚書を通達。新聞・ラジオ・雑誌の事前検閲を開始。東京日比谷第一生命相互ビルにGHQ本部を設置。GHQ日本に与える新聞遵則(プレス・コード)を交付。 「バンドラの匣」(二一治)、「日本再建の為に」(石川達三)、「人間の回復」(徹三)、「言論なほ不信」、「表現の自由と正直——文芸家協会再建」(舟橋聖一)、「配給された「自由」」(河上徹太郎)、「新日本文学の端緒」(宮本百合子)、「光を見失はずに——文芸時評」(板垣直子) 発表。 『赤旗』、『文芸春秋』、『文学』復刊。安部磯雄・賀川豊彦ら、自由懇話会を結成。平野謙ら、松戸の佐々木基一宅で「近代文学」創刊を決定。山本有三・志賀直哉・和辻哲郎・安倍能成ら、同心会を結成。GHQ、政治的・民事的・宗教的自由に対する制限の撤廃を政府に要求。徳田球一・志賀義雄ら政治犯釈放、自由戦士出獄歓迎人民大会開催。マツカーサー、憲法の自由主義化を要求、憲法改正の検討始まる。読売新聞社に民主化運動起り、各社に波及。 『黒猫』(島木健作)、「新文学への出発」(蔵原惟人)、「日本の歴史の再検討」(羽仁五郎)、「自由は誰のものか」(窪川鶴次郎)、「どうしてかういふことがあるのか」(中野重治)、「文学に於ける民主主義の問題」(徳永直)、「文学的良心の恢復」(岩上順一)、「戦争責任の究明」(山川均) 文学者の態度」(正宗白鳥) 発表。 『新生』、『人民評論』創刊。『日本文書新聞』、『新潮』、『文芸首都』復刊。『文芸読物』、『文芸春秋・オール読物』と復題して復刊。人口調査、総人口七千九百九十九万八千四百四人。日本社会党(書記長片山哲) 結成。新日本婦人同盟(会長市川房枝) 結成。GHQ、政府による検閲制度の廃止を指令。日本自由党(総裁鳩山一郎) 結成。鶴見祐輔ら、日本進歩党を結成。治安警察法廃止公布。 「真理と美の力——わが文学の途」(武者小路実篤)、「民主主義と共に」(大熊信行)、「事件としての人間」(高見順)、「文化破壊と文化保護」(惟人)、「文学に於ける民主主義の問題」(直)、「自恃と青春——文芸時評」(北条誠)、「近代日本文学の発想」(福田恆存)。				

21年

「戦後の文学に就て」(谷崎精二ほか)発表。『悉皆屋康吉』(舟橋聖一)刊。

『早稲田文学』復刊。文芸家協会、日本文芸家協会と改称し、再出発のため創立総会を開催。蔵原惟人・中野重治ら、新日本文学会を創立。全日本教員組合結成。戦争犯罪人追及人民大会開催。GHQ、農地改革に関する覚書を発表。衆議院議員選挙法改正公布(婦人参政権)。国家総動員法等廃止。労働組合法公布。

「灰色の月」(志賀直哉)、「赤蛙」(健作)、「死霊」——三三九(埴谷雄高)、「踊子」、「浮沈」——6(永井荷風)、「島崎藤村」——2(平野謙)、「芸術・歴史・人間」(本多秋五)、「展望」——12(吉見)、「蔵原惟人を囲んで」(『近代文学』同人座談会)発表。

『世界』「人間」「展望」『近代文学』「新小説」「潮流」「真善美」『新文学』創刊。『中央公論』「改造」復刊。民主主義科学者協会創立。天皇、神格否定を宣言。GHQ、軍国主義者の公職追放、超国家主義団体の解散を指令。日本労働組合同盟結成。隠匿物資の摘発始まる。野坂参三帰国。国際連合第一回総会開催。朝鮮独立につき第一次米ソ会談。

「塩花」(豊島与志雄)、「浮沈」(宇野浩二)、「一人ゆく」(平林たい子)、「毒」(聖一)、「第二の青春」(荒正人)、「日本現代小説の弱点」(桑原武夫)、「政治と文化」(惟人)発表。『無常といふ事』(小林秀雄)刊。

「新人」『文明』『世界評論』『世界文化』『評論』創刊。『三田文学』復刊。出版界戦犯七社の処置決定。日本民主主義聯盟結成、機関誌『民衆の旗』創刊。金融緊急措置令公布、新円切替始まる。食糧緊急措置令公布。日本農民組合結成。第一次農地改革始まる。朝鮮に米ソ合同委員会成立。

「わが胸の底のこゝには」——二二・四・二五——7——9(高見順)、「播州平野」——二二・1(百合子)、「妻よねむれ」——二二・3(徳永直)、「そっくりそのまま」(なかのしげはる)、「人民戦線を論ず」(山川均・長谷川如是閑)、「新日本文学の社会的基礎」(惟人)、「永井荷風の新作」(白鳥)、「罹災日録」(荷風)発表。

『思潮』『朝日評論』『新日本文学』『解放』創刊。児童文学者協会創立。米教育使節団来日。物価統制令公布施行、旧円停止。労働組合法施行。政府、憲法改正案発表。

「世相」(織田作之助)、「暗い絵」——10(野間宏)、「戦争と文学者の責任」(如是閑)、「文学者の責務」(正人ほか)、「堕落論」——5(坂口安吾)、「小林秀雄論」(秋五)、「中野重治を囲んで」(『近代文学』同人座談会)発表。

『婦人公論』『座右宝』「黄蜂」『思索』「世界文学」『芸林閑歩』創刊。『日本評論』復刊。新選挙法による総選挙、初の婦人参政。倒閣国民運動展開。全日本炭鉱労働組合連合会結成。プロ野球復活。

「聖ヨハネ病院にて」(晩)、「戯曲 なやたけ」——8(加藤道夫)、「民主主義的文学の進路」(順一)、「武田麟太郎と島木健作」——7(康成)発表。『日本文学の諸問題』(重治)刊。

『進路』『饗宴』『思想の科学』創刊。極東軍事裁判開始。戦後初のメーデー行われる。マッカーサー、大衆示威運動に警告。天皇、マッカーサーを訪問。

2	1 ²² 年	12	11	10	9	8	7	6
								「白痴」(安吾)、「文学における戦争責任の追求」(小田切秀雄)、「芥川竜之介論」——10(福田恆存)、「武田麟太郎論」(吉見)、「宮本百合子を聞んで」(近代文学)同人座談会)発表。「細雪上巻」(谷崎潤一郎)、「文学と人間」(春野季吉)刊。 「文化評論」『女性改造』創刊。歴史学研究会再建。日本文学協会創立。GHQ、占領目的違反取締令公布。農地改革法案公表。キーンナン検事、天皇を裁かずと言明。労組の結成相次ぐ。 「外套と青空」(安吾)、「才子佳人」(武田泰淳)、「無尽燈」(石川淳)、「人間の死について」(羽仁五郎)、「人間性と人間味」(中島健蔵)、「志賀直哉論」(順一)発表。 「芸術」『世代』「批評」創刊。読売新聞第二次スト、四日間休刊。第二次農地改革法案閣議決定。国鉄争議始まる。 「町工場」(小沢清)、「主体の恢復」(小田切秀雄)、「批評の人間性」——126(重治)発表。「つゆじも」(斎藤茂吉)、「人間と文学」(小田切秀雄)刊。
								「高原」『文学季刊』創立。全日本産業別労働組合会議(産別)結成。 「桜島」(梅崎春生)、「年々歳々」(阿川弘之)、「気遣ひ部落周遊旅行」——10(木田稔)、「プロレタリア文学を語る」——12(『近代文学』同人座談会)発表。 「素直」創刊。「新人」廃刊。第一回芸術祭行われる。新聞、通信、放送労組ストライキ宣言。労働関係調節法案決定。国土復興五カ年計画発表される。閣議、スト政治化に対し強硬態度決定。 「かういふ女」(たい子)、「焼跡のイエス」(淳)、「政治と文学」、「政治の優位性とは何か」(謙)、「デカダンス文学論」(安吾)、「二流文学論」(作之助)、「小林秀雄論」(好太)発表。「復興期の精神」(清輝)刊。 「苦楽」『群像』「象徴」『銀河』創刊。「テアトロ」復刊。日本著作家組合結成。教育勅語奉読廃止される。文部省、「く」のあゆみ」を発表。 「思ひ草」——12(浩二)、「第二芸術論」(武夫)発表。 現代かなづかい、当用漢字決定。日本国憲法公布。GHQ、独占企業の解体を指令。 「二つの肉体」(宏)、「親友交歓」(治)、「可能性の文学」(作之助)、「負け犬」(正人)発表。 「創元」『文化展望』創刊。文部省、六・三・三制の新学制を決定発表。財閥解体進む。十一宮家の臣籍降下決定。極東委員会、日本労働組合に関する十六原則を決定。ヴェトナム解放運動起こる。
								「二つの庭」——9(百合子)、「五勺の酒」(重治)、「美事な醜聞」(里見淳)、「戯作者文学論」(安吾)、「私小説の運命」(曉)、「本格的小説談議」(整)、「可能性の文学とは?」(順一)、「作家と作品」——5(浩二)発表。 「文壇」『光』『風雪』創刊。全宮公共闘、二・一ゼネスト決定、GHQの中止指令により中止。 「曲角」(佐多稲子)、「転生」(野上弥生子)、「厭がらせの年齢」(丹羽文雄)、「深夜の酒宴」(椎名麟三)、「新興文学の過去と現在」

- (李吉)、「人間的自由の限界」(梅本克己)、「中野重治覚え書」(吉見)、「織田作之助と坂口安吾」(健蔵)発表。
- 日本ペンクラブ再建。小林多喜二発行われる。用紙統制強化で雑誌の廃休刊相次ぎ、センカ紙横行。経済復興会議結成。
- 「孤客」(火野葦平)、「肉体の門第一部」(田村泰次郎)、「肉の火」(舟橋聖一)、「ピルマの駭琴」一三三(竹山道雄)、「ヴィヨンの妻」(治)、「戯曲」風浪」(木下順二)、「近代と現代」(唐木順三)、「近代文学の運命」(中野好夫)、「偉大な知識人」(中村真一郎)発表。
- 「文化革命」創刊。教育基本法公布。出版危機の打開策論議される。全国労働組合連絡協議会(全労連)結成。
- 「或る告白」(順)、「いすかのほし」(淳)、「華燭」(中山義秀)、「ろまんの残党」(石川達三)、「いのちの構図」(立野信之)、「歴史における主体の問題」(林健太郎)、「女房の文学論」(謙)、「文学の肉声」(光夫)発表。
- 「諷刺文学」『文学会議』劇作(第二次)創刊。六三制の新教育制度発足。中野重治、山本有三ほか、多数文化人参議院議員に当選。ムーラン・ルージュ再開。労働基準法公布。独占禁止法公布。GHQ、労働者教育を強調。
- 「青年の環」(原題「華やかな色どり」)一〇九(宏)、「近代の克服」(恒存)発表。
- 「日本小説」『文芸往来』『ヨーロッパ』創刊。日本国憲法施行。経営者団体連合会(経団連)創立。
- 「重き流れのなかに」(麟三)、「雪のイヅ」(淳)、「文学のイデーについて」(順一)、「教祖の文学」(安吾)、「二十世紀小説の運命」(真一郎)、「平野謙と荒正人」(クボカワ ツルジロー)発表。
- 「日本未来派」創刊。『文学界』復刊。日本教職員組合結成。
- 「望みなきに非ず」一〇一(達三)、「鷲毛」一〇(聖一)、「芸術家」一〇八(文雄)、「斜陽」一〇(治)、「狂った季節」一三三(広津和郎)、「戦争と自分」一〇八(勝一郎)、「文学者の責任」(秀雄)、「得能五郎と鳴海仙吉」(重治)、「善意の文学」宮本百合子について「(恒存)発表。
- 「総合文化」『不同調』創刊。極東委、対日政策指導原則を發表。全国農民組合結成。
- 「妖婆」(真一郎)、「散る日本」(安吾)、「新夜の仕度」(由紀夫)、「顔の中の赤い月」(宏)、「瘦のすゑ」(泰淳)、「新しい人間像の発見」(順一)、「批評に就いて」(健蔵ほか)、「解説の解説」隅外位置づけのための雑文」(重治)、「宮本百合子断片発表」『島崎藤村』(謙)、「歌声よ、おこれ」(百合子)刊。
- 「詩学」創刊。言論界初の追放發表。炭鉱国管法案閣議決定。
- 「処女懐胎」一〇二(淳)、「日の果て」(春生)、「不連続殺人事件」一三三(安吾)、「途上」(田中英光)、「黒札」(たい子)、「革命の文学と文学の革命」(加藤周)、「島木健作論」(森山啓)発表。「作家の態度」(恒存)、「戦争と平和」論」(秋五)刊。
- 「小説新潮」創刊。小、中学校に社会科の授業始まる。
- 「道標」一二五(百合子)、「天使」(真一郎)、「哭壁」一二三(文雄)、「昭和文学の二つの論争」(謙)、「文学的脱出」(真一郎)、「宮本百合子論」(正人)、「鳴海仙吉」の弁明」(整)発表。「戦後の虚実」(河上徹太郎)刊。

6	5	4	3	2	1 ²³ 年	12	11
『頭文字』(由紀夫)、『グッドバイ』、『人間失格』—8(治)、『人生実験』(たい子)、『壁の中の記録』(麟三)、『道化の文学』—太宰治 『次元』、『同時代』、『文学集団』創刊、『素直』、『現代人』廃刊。 『龍川鶴次郎』、『鑑賞家失格』(謙)、『プロレタリア文学再検討の一視点』(秀雄)発表。 『少年』—12(康成)、『桜桃』(治)、『単独旅行者』(島尾敏雄)、『帰郷』—11(次郎)、『心づくし』(荷風)、『創造と批評との統一』(窪川鶴次郎)、『鑑賞家失格』(謙)、『プロレタリア文学再検討の一視点』(秀雄)発表。 『次元』、『同時代』、『文学集団』創刊、『素直』、『現代人』廃刊。	『少年』—12(康成)、『桜桃』(治)、『単独旅行者』(島尾敏雄)、『帰郷』—11(次郎)、『心づくし』(荷風)、『創造と批評との統一』(窪川鶴次郎)、『鑑賞家失格』(謙)、『プロレタリア文学再検討の一視点』(秀雄)発表。 『龍川鶴次郎』、『鑑賞家失格』(謙)、『プロレタリア文学再検討の一視点』(秀雄)発表。 『少年』—12(康成)、『桜桃』(治)、『単独旅行者』(島尾敏雄)、『帰郷』—11(次郎)、『心づくし』(荷風)、『創造と批評との統一』(窪川鶴次郎)、『鑑賞家失格』(謙)、『プロレタリア文学再検討の一視点』(秀雄)発表。	『吉見』発表。『落し傘』(金子光晴)刊。 新制高校発足。国立国語研究所設置。 『勤労者文学』、『改造文芸』、『現代詩』創刊。『文明』、『象徴』廃刊。日本著作権連盟創立。文筆家二百七十名追放。新警察制度発足。全通スト拡大。GHQ、スト中止の覚え書発表。 『サンホセ野戦病院』(昇平)、『ジロリの女』(安吾)、『殉教』(由紀夫)、『小さな蠅瀬川のはとり』(曉)、『渡り鳥』(治)、『道德的』(順)、『二十世紀小説の二性格』(光夫)、『物語りの発想』(整)、『歌声は何処からおこるか』(座談会・秀雄ほか)、『中野重治覚書』(吉見)発表。『落し傘』(金子光晴)刊。	『野ざらし』(淳)、『如是我聞』—6(治)、『実存主義』—4(矢内原伊作)、『自然主義盛衰史』—12(白鳥)、『プロレタリア文学から何を学ぶか』—5(座談会・惟人ほか)発表。 『勤労者文学』、『改造文芸』、『現代詩』創刊。『文明』、『象徴』廃刊。日本著作権連盟創立。文筆家二百七十名追放。新警察制度発足。全通スト拡大。GHQ、スト中止の覚え書発表。 『サンホセ野戦病院』(昇平)、『ジロリの女』(安吾)、『殉教』(由紀夫)、『小さな蠅瀬川のはとり』(曉)、『渡り鳥』(治)、『道德的』(順)、『二十世紀小説の二性格』(光夫)、『物語りの発想』(整)、『歌声は何処からおこるか』(座談会・秀雄ほか)、『中野重治覚書』(吉見)発表。『落し傘』(金子光晴)刊。	『野ざらし』(淳)、『如是我聞』—6(治)、『実存主義』—4(矢内原伊作)、『自然主義盛衰史』—12(白鳥)、『プロレタリア文学から何を学ぶか』—5(座談会・惟人ほか)発表。 『勤労者文学』、『改造文芸』、『現代詩』創刊。『文明』、『象徴』廃刊。日本著作権連盟創立。文筆家二百七十名追放。新警察制度発足。全通スト拡大。GHQ、スト中止の覚え書発表。 『サンホセ野戦病院』(昇平)、『ジロリの女』(安吾)、『殉教』(由紀夫)、『小さな蠅瀬川のはとり』(曉)、『渡り鳥』(治)、『道德的』(順)、『二十世紀小説の二性格』(光夫)、『物語りの発想』(整)、『歌声は何処からおこるか』(座談会・秀雄ほか)、『中野重治覚書』(吉見)発表。『落し傘』(金子光晴)刊。	『野ざらし』(淳)、『如是我聞』—6(治)、『実存主義』—4(矢内原伊作)、『自然主義盛衰史』—12(白鳥)、『プロレタリア文学から何を学ぶか』—5(座談会・惟人ほか)発表。 『勤労者文学』、『改造文芸』、『現代詩』創刊。『文明』、『象徴』廃刊。日本著作権連盟創立。文筆家二百七十名追放。新警察制度発足。全通スト拡大。GHQ、スト中止の覚え書発表。 『サンホセ野戦病院』(昇平)、『ジロリの女』(安吾)、『殉教』(由紀夫)、『小さな蠅瀬川のはとり』(曉)、『渡り鳥』(治)、『道德的』(順)、『二十世紀小説の二性格』(光夫)、『物語りの発想』(整)、『歌声は何処からおこるか』(座談会・秀雄ほか)、『中野重治覚書』(吉見)発表。『落し傘』(金子光晴)刊。	『野ざらし』(淳)、『如是我聞』—6(治)、『実存主義』—4(矢内原伊作)、『自然主義盛衰史』—12(白鳥)、『プロレタリア文学から何を学ぶか』—5(座談会・惟人ほか)発表。 『勤労者文学』、『改造文芸』、『現代詩』創刊。『文明』、『象徴』廃刊。日本著作権連盟創立。文筆家二百七十名追放。新警察制度発足。全通スト拡大。GHQ、スト中止の覚え書発表。 『サンホセ野戦病院』(昇平)、『ジロリの女』(安吾)、『殉教』(由紀夫)、『小さな蠅瀬川のはとり』(曉)、『渡り鳥』(治)、『道德的』(順)、『二十世紀小説の二性格』(光夫)、『物語りの発想』(整)、『歌声は何処からおこるか』(座談会・秀雄ほか)、『中野重治覚書』(吉見)発表。『落し傘』(金子光晴)刊。	『野ざらし』(淳)、『如是我聞』—6(治)、『実存主義』—4(矢内原伊作)、『自然主義盛衰史』—12(白鳥)、『プロレタリア文学から何を学ぶか』—5(座談会・惟人ほか)発表。 『勤労者文学』、『改造文芸』、『現代詩』創刊。『文明』、『象徴』廃刊。日本著作権連盟創立。文筆家二百七十名追放。新警察制度発足。全通スト拡大。GHQ、スト中止の覚え書発表。 『サンホセ野戦病院』(昇平)、『ジロリの女』(安吾)、『殉教』(由紀夫)、『小さな蠅瀬川のはとり』(曉)、『渡り鳥』(治)、『道德的』(順)、『二十世紀小説の二性格』(光夫)、『物語りの発想』(整)、『歌声は何処からおこるか』(座談会・秀雄ほか)、『中野重治覚書』(吉見)発表。『落し傘』(金子光晴)刊。

7	8	9	10	11	12
論」—7 (恒存) 発表。『現代人の遍歴』(勝一郎) 刊。 『赤門文学』『小説界』創刊。『進路』『文化展望』『文壇』廃刊。日本文化を守る会結成。新日本文学会「平和宣言」を発表、知識人の統一戦線要望の声起る。国会図書館開設。総同盟、全労連を脱退。 『不良少年とキリスト』(安吾)『転向論』(杉浦明平)、『笑ひの喪失』(光夫)、『戦後文壇に与ふ』(山本和) 発表。『厭がらせの年齢』(文雄)、『戦後文芸評論』(謙) 刊。 『方舟』『文学前衛』『未来』『心』創刊。『文章倶楽部』復刊。日本学術会議法成立。マツカーサー公務員の争議禁止を含む国家公務員法改正を要望。国家公務員法改正。政令二〇一号公布。反対運動起る。 『思ひ川』—12 (浩二)、『猫男』(春生)、『戦争責任と天皇の退位』(大山郁夫)、『世代の差違をめぐって』(『世界』座談会)、『近代主義とその克服』(惟人)、『太宰治のこと』(麟二) 発表。『太宰治論』(吉見) 刊。 『作品』創刊。『座右宝』『阿彌』廃刊。世界平和国際知識人会議開催。民主主義擁護同盟結成。芦田首相、共産党員の公職禁止を考慮中と言明。対日理事会、国家公務員法の改正をめぐって米・ソの意見対立。 『日髪』(麟二)、『テニヤンの末日』(義秀)、『主体的知識人』(正人)、『戦後文学の検討』(座談会・順一ほか)、『我々は戦争をかく見る』(泰淳・公房ほか) 発表。『道標第一部』(百合子)、『終りし道の標へに』(安部公房)、『蛾』(金子光晴) 刊。 『方舟』廃刊。全学連結成。政府、政令二〇一号は違憲にあらずと発表。 『仮装の近代性』(恒存) 発表。『迷路第一部』(弥生子)、『永遠なる序章』(麟三)、『プロレタリア文学再検討』(秀雄編) 刊。 『文学者』創刊。『新生』『芸林閑歩』『高原』廃刊。 『神坂四郎の犯罪』—二四2 (達三)、『光りをかゝぐる人々』—二四4 (直)、『馬鹿』—12 (武者小路実篤)、『てんやわんや』—二四4 (獅子文六)、『晩菊』(林芙美子)、『戯曲』火宅 (由紀夫)、『戦後作家について』(整)、『戦後文学の展望』(正人) 発表。『屍の街』(大田洋子) 刊。 『日本小説』『赤門文学』『文学前衛』『未来』廃刊。極東軍事裁判判決、東条ら七名に絞首刑。国家公務員法改正案成立。 『野火』(昇平)、『獅子』(由紀夫)、『愛のかたち』(泰淳)、『世界観芸術の屈折』(清一郎)、『戦後文学とその周辺』(『改造』座談会)、『石川淳論』(基一) 発表。『哭壁上下巻』(文雄)、『小説の方法』(整) 刊。 『文芸評論』『序曲』『文潮』創刊。GHQ、経済安定九原則を発表。					

第一章 昭和二年の意味

戦後に創刊・再刊された雑誌はおびただしいのですが、その大部分は昭和二年に集中しています。今度それらの雑誌のうち昭和二年分をまとめて読み返してみても、まず第一に感じたことは、既に言い古されたことですが、老大家の復活という現象です。

昭和二年に限って言えば、まだ戦後派は片隅の存在だという印象はまぬがれません。とりわけ、永井荷風と正宗白鳥の活躍が目立ちます。荷風は「踊り子」「浮沈」「問はずがたり」と、矢つぎばやに発表し、戦争で荒廃した人々の心に小説を読む楽しさを味わわせてくれたようです。しかし大部分は戦争中に書きためられたもので、戦後に執筆されたものは「問はずがたり」からです。

共通して戦争とは無縁の愛欲の世界が展開されています。白鳥の「戦災者の悲しみ」ほかのたくさん短編小説は、随筆的小説とも呼ぶべきもので、虚無的な主体と戦後の世相に対するあくことのない好奇心という一見矛盾する要素が巧みに結びついて、白鳥の個性を感じさせます。志賀直哉の「灰色の月」は、エゴイズ

ムとヒューマニズムの問題を主題にした作品として、この年の批評家の好評を博していますが、「天声人語」を少しひきのばしたぐらゐの片々たる作品で、創作力の枯渇を感じさせます。

第二に、昭和一〇年前後に作家として登場してきた中堅作家も、この年いっせいに創作活動を再開しますが、とりわけ、のちに無頼派ないし新戯作派として一括される坂口安吾・織田作之助・石川淳などの活躍が目立ちます。安吾は「墮落論」で、すべての日本人は人間として復活するために、一度どん底まで墮落すべきだと主張し、戦中ないし戦前の日本人の精神主義を破壊する爆弾をしかけます。そして、「白痴」や「外套と青空」などの実作で、デカダンスな男女の愛欲の世界を描き、人間の原点を示します。織田作之助の「世相」などの作品も安吾の世界に近く、その「可能性の文学」という評論にしても、志賀直哉をシンボルとする既成のリアリズムに対する反抗の姿勢において、安吾や太宰治のものの仕事と共通します。石川淳の「焼跡のイエス」は、欲望のま

まに行動する浮浪児にイエスの姿を見ている点において、太宰治の「冬の火花」（戯曲）は、「斜陽」の女主人公を思わせる人物を中心に、女の墮落と人間回復を描いている点において、安吾の「墮落論」との血縁関係を感じさせます。同じ男女の愛欲の世界を描いても、荷風の小説は時代を超越したものを感じさせるのに対し、安吾らの小説にはまぎれもない戦後の刻印があります。

第三に、「新日本文学」を中心に、戦前のプロレタリア文学直系の民主主義文学が、この年胎動を始めますが、宮本百合子の「播州平野」を見ても、徳永直の「妻よねむれ」を見ても、この派の人々の信奉するリアリズムの幅が狭く、ほとんど私小説的スタイルないし発想で書かれているのは遺憾です。

以上は、いずれも既成文学の復活と言ってもよいでしょう。それに対し、渋川驍「新文学の担当者」（『新文芸』昭和21・1）のように、多くの制約をもつ既成作家をしりぞけ、無名の新人に未来の文学の担当者を待望する論も、当時くり返されています。これに応えたのが戦後派ですが、昭和二十一年に限ってみる場合、戦後派は一つのまとまった力になっていません。戦後派の核となったのは「近代文学」（昭和21・1創刊）ですが、この雑誌は評論中心です。野間宏の「暗い絵」は「黄蜂」に、梅崎春生の「桜島」は「素直」に、中村真一郎の「死の影の下」は「高原」というように、既成作家に混じって、活動を開始します。これらの人々が後に「近代文学」を核として結集するのです。

本多秋五は、「近代文学」創刊号の「芸術・歴史・人間」で、白樺派の影響を思わせながら、芸術家にとっていかに大事なものは自我であり、人間の内部の諸要求であると言っています。荒正人はこれを受けて、「第二の青春」で、浅薄なヒューマニズムを退け、エゴイズムから出発すべきことを熱っぽく説いています。これを小田切秀雄の言葉にすれば、「近代的人間の欲求」になりますが、「近代文学」の人々は、プロレタリア文学運動の反省や、戦争を阻止しえなかった知識人の無力さを反省し、自我から出発すべきことを説きます。これがのちに主体性という言葉と結びついていくことは周知のとおりです。この立場からは、「暗い絵」の主人公のエゴに固執し、自己の絶対性の動きを重視する生き方、のちの椎名麟三の「孤独において死にうるもの」の追求は共感できるものです。

しかし、同じ戦後派とはいえ、「世代」の創刊号（昭和21・7）から「カメラアイズ」の連載を始めたマチネボエティックの三人の評論、特に加藤周一の星革派批判は、若い世代に歴史的社会的洞察力を要望しています。これは戦後の青年にとっていかに合理的な考え方ですが、自我の内面に暗い傷痕を抱く「近代文学」の人々とは、かなり違った戦後の出発点といえます。

この年発表された戦後派の小説を見ても、既成文学とはっきり異質です。「暗い絵」の象徴詩と革命文学の合体、生理・心理・社会の総合的リアリズム、「死の影の下」の魂のリアリズム、こ